

「二月泣きイタヤ」から明日の山形を想う

東北芸術工科大学 芸術学部文芸学科 教授
齋藤 潤

東北の山村では冬の終わりにイタヤカエデの樹液を飲んでいて、という話をずいぶん昔になにかの本で読んだことがある。

サトウカエデの樹液を煮詰めたカナダのメープルシロップは有名だが、日本にも樹液を口にする文化があったのかと、新鮮な驚きを覚えたものだった。

その後、アイヌ民族として初めて国会議員になった萱野茂氏の著書『アイヌ歳時記』で、早春に採取していたというイタヤの樹液（アイヌ語でニトベ）に再会した。

——家へ持って帰り、鍋で煮詰めてもらい、できた飴をなめるのが春の楽しみの一つであった。枯れたイタドリの節を抜いて作った筒に入れて、一晩雪の中に立てておき自然のアイスキャンデーを作ったりもした。

昨年の夏の終わり、岩手県の浄法寺で漆掻き作業を見学させてもらった時のこと。幹に刻まれた傷から滴る白い樹液を見るうちに、用途はまったく異なるのだが、なぜかイタヤの樹液が頭をよぎった。

急に気になり、本を探してみたが見つからない。そこでネットで調べてみると、山形県金山町で「暮らし考房」を主催する、農林家の栗田和則さんに行き当たった。

20年以上前から、イタヤの樹液を採取してシロップなどを作っているという。その道の専門家として、平成17年度地域特産物マイスターにも認定されていた。

連絡を取ったところ、「二月泣きイタヤ」という言葉を教えてくれた。春の訪れを控えた旧暦の2月、傷つけたイタヤから樹液が勢いよく流れ出るさまを例えた表現だった。

3月に入ってから、雪山での樹液採取に同行さ

せてもらった。気温が低いので出ないかもしれないと言われたが、ドリルで穴を開けるとイタヤは静かに涙を滴らせた。指先につけて舐めると、儂く切ない甘さ。一瞬、樹の香が鼻腔に満ち、白昼夢のように消えた。3月6日のことだった。

それから5日後の午後、東日本を大震災が襲った。水や電気、ガス、通信、交通、食糧など、あって当然と思っていた日常生活に欠かせないものが、一瞬にして失われるという事態に直面する。

一体どうしたらいいのか。途方に暮れながらも、イタヤが流した涙のきらめきと、あるかなきかの甘さを思い出していた。

イタヤの樹液に象徴される、忘れていた山形の大地が孕む可能性に、目を向けなくてはいけない。経済行為としてではなく、人間に本当に必要なものは何かを考えるために。

欲しいものを無理やり手に入れるのではなく、与えられたものを精いっぱい利用して満足できる暮らし。高度経済成長を達成する前、昭和30年代までの日常生活を振り返れば、多くの手がかりが潜んでいるはずだ。

当時の生活に回帰せよというのではない。風土と意識的に向き合うことによって、芽生えてくる新しい生き方が、混迷の時代において一つの指針になりうると思うからだ。

齋藤 潤 (さいとう・じゅん)

岩手県盛岡市生まれ。東北芸術工科大学芸術学部文芸学科教授。

幼年期1年弱、長井市に住んだことがある。旅行家・著述家。島、食文化、伝統工芸、水産農林業、環境などをテーマに執筆。『日本《島旅》紀行』（光文社新書）など、島に関する著作が多い。